

英国臨床実習短期留学

2015年2月23日-3月30日

■ はじめに

私は2015年3月2日-3月27日まで、イギリスのNewcastle 大学医学部で、臨床実習をさせていただきました。医学教育振興財団（以下：JMEF）からの派遣で、全国の15名の5年生と一緒に渡英しました。今回の実習を実現させてくださったJMEFの関係者、佐賀大学の学生課・国際交流部、そして受け入れのNewcastle大学のスタッフの皆様に深く感謝します。この報告書は後輩へのアドバイスも含めて記載していますので、参考になれば幸いです。

■ 留学への志望動機

英国での臨床留学に応募したきっかけは、佐賀大学のハワイ大学臨床実習留学の選考に落ちたことです。学生の中に欧米の臨床現場を見てみたいと強く思っていたので、JMEFの留学に応募することにしました。将来は国際機関において公衆衛生・グローバルヘルスの仕事に従事したいと考えており、将来の同僚となる欧米の人材がどのような医学教育を受けているのか知りたかったからです。また私は中高をアメリカで過ごしていたので、医療・文化面でアメリカとイギリスの比較もしたいと考えていました。

■ JMEF 英国短期臨床留学とは？

JMEFが毎年全国公募する留学プログラムであり、大学からの推薦、書類審査、面接試験という選考プロセスがあります。イギリス全土の4大学に16名の医学部5年生が派遣されます。プログラムは20年以上の歴史があり、Newcastle 大学で初期に受け入れをしてくださっていた先生はもうリタイアされています。派遣された同窓生での繋がりも強く、同窓生制用のFacebookのグループには雑誌・メディアで目にする先生達の名前があり驚きました。大学・世代を超えた繋がりができることも、このプログラムの良いところだと思います。

■ 留学までの準備

留学までの準備は大きく二つに分かれます。選考に合格するまでと、合格してから渡航までです。まず、大学からの推薦ですが、各大学2名までの学生しか推薦できないので、他大学では学内選考があったようです。幸い

佐賀大学では私しか応募しなかったもので、そのまま JMEF での選考に進むことができました。書類審査では、志望動機、学部長からの推薦書、IELTS (イギリス版 TOEFL) のスコア、大学の成績等が評価の対象となります。特に IELTS が重要であり、現地で通用する英語力を求めているのだと思います。私は Overall で 8 を取ることができ、他大学の学生も平均して 8 は取っていたと思います。1 回の試験が 2.5 万円、福岡の西南大学で受けることができます。8 月の書類審査締め切りに間に合うには、6 月末までに受験しなくてはなりません。計画的に準備することをおすすめします。合格後もビザ取得 (東京か大阪まで赴き申請)、地元県警から犯罪証明書の発行、受け入れ大学の寮の申請など事務的な仕事量はかなり多いです。書類以外では、佐賀大学の実習との調整が必要なので、学生課に相談して、各医局にお願いする必要があります。これらの過程全てにおいて、学生課からの助けが必須です。日頃から学生課のスタッフと良好な関係を築いておくことは大切です。

■ Newcastle 大学医学部について

Newcastle 大学医学部は、イギリス北部の Newcastle upon Tyne という街にあり、ロンドンからは列車で 3 時間、エジンバラには 1 時間という位置に在しています。大学病院(Royal Victoria Infirmary; RVI)は、北部の医療圏を担う中核医療機関であり、イギリスでも 3 施設しかないエボラ患者の受け入れ設備も整っていました。

イギリスの医学部は基本 5 年制であり、Newcastle 大学には各学約 350 名の学生が学んでいるということでした。1-2 年生が座学で基礎医学等を学び、3 年生からは臨床医学をベッドサイドと座学で学ぶようです。4 年生には 6 週間の選択科目で実習して、自分の興味のある診療科に対する理解を深めます。全国统一の国家試験はなく、各医学部の卒業試験に合格することで医師になれるようです。5 年生の学生は、卒業直前は研修医とほぼ同等の仕事をするとのことでした。ベッドサイドでの学習に力を入れているようで、身体診察は 3・4 年生共に 5 年生である私よりも上手でした。

■ 1 週目 (Respiratory Medicine 呼吸器内科)

呼吸器内科では外来と病棟実習をメインで行いました。受け入れ担当の Dr.Stenton はかなり熱心で、外来では全ての患者に聴診させてくれ、病棟では患者の協力を得て私たちに呼吸器診察を詳細に教えてくださりました。

ここで私が得たのは聴診の聴き分けです。1週間の終わりには外来で、**Bronchial Breathing**、**Wheezes**、**Crackles** など鑑別できてきている自分がいることに驚きました。また、非常に興味深かったのは **Cystic Fibrosis** の外来であります。欧米人に特有な遺伝疾患であり、日本で見るとはまずありません。呼吸器はじめ、膵臓など全身臓器が犯されます。特に呼吸器における免疫機能が阻害されるので、患者は継続的に抗菌薬を摂る必要があります。

■ 2週目 (General Surgery 消化器外科)

翌週は消化器外科(下部消化管)にて実習しました。印象的であったのは、手洗いをさせてもらった時の清潔操作についてです。手洗いの石鹸・水道は自動ではないし、手術室では術野に入る外科医以外はマスクをしていないし、麻酔科医も患者の頭もとでコーヒーを飲んでいました。日本の清潔操作が過剰なのかもしれませんが、医療におけるカルチャーショックを経験しました。また、下部内視鏡での検査や、直腸からの生検でも、全身麻酔を行うという処置には驚きました。香港出身の外科医いわく、「NHSだとお金を使いたい放題だから何でも全身麻酔する。そして、この国の人々は **Weak** (か弱い) だからだ!」とのこと。オペの控え室では外科医の **Consultant** (指導医クラス) から NHS に対する外科医の率直な想いも聞くことができ、非常に興味深かったです。

■ 3/4週目 (Infectious Disease 感染症)

最後の2週間は、Newcastle 大学の受け入れ責任者であり感染症内科の部長である **Dr.Price** のもとで実習させていただきました。私がここで一番見てみたかったのは HIV 外来であり、2週間を通してかなりの数を見ることができました。初めて HIV 診療の現場を見て、HIV・AIDs に対する認識が180度変わりました。不治の病という認識から、薬でコントロールしながら生涯付き合っていく病気だという認識に変わりました。服薬をしっかりしていて、**CD4** が安定しており、**Viral Load** (ウイルス量) も検知されない状態であれば、ヘテロセクシュアル(男女間)の性交渉において感染するリスクは限りなくゼロに近づけることができるという研究も発表されているようで、HIVに常識は日々変遷しているようでありました。

■ 振り返って(得たこと、準備不足であったこと)

一ヶ月で得たことは、大きく3つあります。一つ目は、臨床能力の向上で

す。前述の呼吸器内科の実習で練習して呼吸器診察は、研修医になっても役に立つと感じています。二つ目は、イギリスの医療に対する見識を持たれたことです。僕は NHS というシステムに非常に興味があったので、文献やドキュメンタリーを見て予習しました。現地では大学病院、GP（かかりつけ医クリニック）、プライベートクリニック（体調不良の際に受診）とシステムを取り巻くいろんな医療機関を見ることができ、それぞれの医療者から話を聞いたのは勉強になりました。三つ目は、他大学の同期との繋がりです。Newcastle 大学に派遣された仲間だけでなく、他の3大学に派遣された仲間とイギリス最終日には交流会で会うことができました。佐賀大学だけでは会うことのできないユニークな同級生と日本での実習、イギリスでの経験、将来へのビジョンなどについて話すことができました。これからも彼らとの関係が続くと思うと嬉しい限りです。

私の反省点としては、2つあります。1つ目は、医学知識・医学英語をもっと勉強しておけばよかったということです。英会話は問題ないので、実習中に英語で苦勞することはなかったですし、医学英単語の意味を聞くことで乗り越えていましたが、知っていることに越したことはないと思います。加えて知識が乏しい分、積極的にディスカッションに介入することを躊躇してしまいました。2つ目は、自分の留学の目的をよりクリアにしていくべきであったということです。欧米の医学教育レベルを見たいという志望動機でしたが、あまり明確に日本とどう比較したいのか決めていなかったのも、実習中の学生の過ごし方や振る舞いを見て、日本と大して変わらないと思い、日本の医学教育は世界スタンダードだと満足してしまいました。おそらく僕の目的・目標の設定の仕方が間違っており、自分の興味は公衆衛生や医療システムにあり、それを学ぶ最高の教材は NHS なので、そこに焦点を当てて日本の国民皆保険や世界での Universal Health Care について臨床現場から考える留学にすれば良かったなと今更ながら思います。陳腐なアドバイスですが、留学における明確な目標設定は重要です。自分の興味のあることで考えてください。でないと、1ヶ月間も異国でアクティブに実習することは大変だと思います。

臨床留学という名で派遣していただいたが、この1ヶ月で気づいたのは自分の関心は「臨床だけでない」ということです。Newcastle 大学で実習を始める前には、London School of Hygiene and Tropical Medicine も見学さ

せてもらい、イギリスで公衆衛生を学びたいと強く思いました。当面の目標は、自分が公衆衛生で何をしたいのかをより明確にすることと、国家試験に合格して日本で研修医として臨床経験を積むことです。非常に良い経験をさせていただいたので、これからも精進していこうと思います。



実習先の RVI の新棟